



発行所  
カトリック長崎大司教区  
本部事務局  
〒852-8113  
長崎市上野町10-34  
カトリックセンター内  
TEL 095(846)4246  
FAX 095(842)4460

# 「司祭年」にあたって

長崎大司教

高見 三明

教皇様は、司祭の保護の聖人である聖ビアンネーの没後百五十周年(8月4日)を記念して、「教会と現代社会における司祭の役割と使命の自覚がますます深められていくために」、今年6月19日から来年6月19日までを「司祭年」と定められました。そこで、「司祭」(サチエルドス)、「(司祭」＝神父と区別)の重要な意味について考えたいと思います。

## 1. すべてのキリスト信者が「司祭」であることの意味

教会は、旧約の神の民が「司祭の

王国」(出19・6)であったのと同じように、「司祭」(黙示1・6・5・10)あるいは「司祭の共同体」(一ペト2・5、9)です。ただし王であり司祭であるキリストを介してその使命を果たします。

「司祭」とは、神からの恵みを人々にもたらし、人々のお応えを神に届けるという仲介の役割、つまり神と人との間に交わりをつくる使命を果たす人のことです。キリストこそ、御父から遣わされて、神のことばを宣べ、死と復活を通して神と人類の和解と交わりおよび人間の兄弟的な共同体の創設を成し遂げた、神と人

間の真の仲介者です。キリスト信者は、洗礼を受けることによってこのキリストの司祭職にあずかります。すなわち、イエスが実現した救いの福音を伝え、典礼とくに感謝の祭儀を通してその救いのわざを行うのです。従って、祈り、奉獻生活、結婚

と家庭生活、愛の実践、労働、教会活動、休暇などを神に献げ(ローマ12・1・ヘブライ13・15-16参照)、さらにそれらすべてを感謝の祭儀において人々の聖化と救い、神の栄光と賛美のためにキリストを通して父である神に献げるのです。ところで、預言職も王職もこの司祭職に秩序づけられていきます。つまり、自分たちの生活の証しとことばによって福音を伝えるという預言職は、人々が信じて洗礼を受け、感謝の祭儀において生活の実りを神の栄光と賛美のため献げるようになるために行使されます。また聖なる生活(ローマ6・12-13)によって自分の中にある罪の支配に打ち勝ち、社会をより福音にかなったものにするために人々に奉仕して彼らを真の王であるキリストに導くという王職も、その実りを感謝の祭儀において神への賛美と感謝としてささげることが目指されています。キリスト信者は、司祭として

預言職と王職を果たし、すべてにおいて交わりを実現するよう招かれているのです。

## 2. 司教および司祭が「司祭」であることの意味

この司祭である神の民の中からキリストによって選ばれた司祭(プレズビテル)と司教(エписコプス)は、叙階の秘跡によって、頭であり牧者であるキリストの永遠の司祭職とその任務に特別に参与します。頭であり牧者であるキリストにかたどられるのですから、肢体あるいは羊である修道者・信徒と本質的に異なる存在になります。そして、頭であり牧者であるキリストといわば一体となつて教え、聖化し、治めるための権能を与えられます。この権能は、神の民がその司祭職を忠実かつ十分に果たすことができるよう「奉仕するため」に与えられます。教会は、頭であるキリストによって成長し(エフェソ4・12-16)、牧者であるキリストの愛によって生かされるものだからです(ヨハネ10・11)。

ところで、司教と司祭は役務者としては同じ「司祭」(サチエルドス)ですが、司教は「司祭職の充満」を

持っています。それは、使徒の後継者である司教だけが、司教・司祭・助祭を叙階し、司祭と助祭の権能の行使を認可することができるからです。しかし、司教は、自分の賢明な協力者である司祭また助祭と共に神の民とすべての人々に奉仕するよう召されています。こうして、キリスト信者の地域共同体（教区）は、ローマ教皇と全世界の司教団との一致と交わりの中にある司教を中心として真のキリストの教会を形づくるのです。

### 3. むすび

キリストのからだ全体、すなわち教会共同体全体が祭司であり、キリストを中心とした自分たちの交わりと、まだからだに属していない人々との交わりを実現すべく働かなければなりません。選ばれた祭司である司教と司祭は頭として、修道者と信徒は肢体として、しかし互いに協働し一体となつてキリストの祭司職を果たすのです。このような恵みをいただいていることを共に神に感謝しましょう。そして神と人々の間にあつて、それぞれに与えられた祭司の役割を忠実に果たしていくことができるよう祈りつつ努めましょう。



## Q & A



### 「司祭年」にあたって

Q. 「パウロ年」が終わったと思つたら今度は「司祭年」という特別年だそうですが、これは何のために定められたのですか。司祭ではないわたしたち信徒にとっては、関係ないことなので、正直なところホツとしているということもあるのですが・・・。

A. 次々と特別年がやってきますので、もはや特別な年ではないという気もしますが、一貫した継続性のある目標を持つていないと、特別年を乗りこなすというより、逆に振り回される心配も出て来るかもしれません。教区の一貫した教会づくりを、特別年の実践によってより活性化するという、基本的な考え方を持つ必要があると思います。さて「司祭年」は何のために定められたのかというと、第一面に大司教様が記しておられるように、「教会と現代社会における司祭の役割と使命の自覚が、ますます深められていくために」ということです。ところでご質問の中に、わたしたち信徒

には関係がないといわれていますが、それはとんでもないことです。役務としての「司祭」と区別するために「祭司」という言葉を使っていますが、信徒の方々も含めて、信者はすべて司祭職を与えられているのです。司祭職、すなわち神様と人間の間の仲介者としての、自分自身の尊い使命をこの「司祭年」に当たり、あらためて確認し合いたいものです。

Q. 昔の長崎教区の神父さま方は「お父さん」という雰囲気があり、お祈りやミサのことだけではなく、あらゆる生活面の指導をしてくださいました。昔と今では神父さま方の仕事は変わったのでしょうか。

A. ド・ロ神父様に象徴されるように、かつての司祭は、あらゆる分野で指導者としての役割を果たしていました。

外国の宣教師のみならず、日本人の司祭になつてからも、今では考えられないようなことまで従事していました。土木建築から、精米所、畜産や漁業など、貧しい信徒のそばにともに寄り添うようにして、時代をリードしていたのだと思います。

その後時代は、次第に専門化の過程を辿っていきました。人々の暮らしは豊かになり、今では本来家庭で行うべき食卓の準備まで業者が担うようになり、商業主義の洪水の中で、人間のあるべき姿が

蝕まれていつています。

司祭の役割もこうした時代の流れの中で、本来の姿は何かということをしつかりとらえた上で、変わっていかねばなりません。かつての司祭たちがかかわっていた実生活面については、一般社会がカバーできる時代になっていきます。いまは、そういう行き過ぎた商業主義に振り回されて、人間の心が渴いており、その部分のケアこそ司祭に求められています。そういう意味で悩み苦しむ人々のいやしであり、よろこびであり、力であるイエス・キリストを紹介するという、司祭本来の仕事に特化できる環境が、整いつつあるということもできるでしょう。

Q. 長崎教区では、評議会組織が少しずつ機能するようになり、司祭と信徒が同じ土俵で話しあい、具体的宣教活動に取り組みようになっていきます。しかしまだまだ聖職者中心から抜け出していないように思うのですが……。

A. 教区評議会の会長は大司教であり、地区評議会の会長は地区長、小教区の場合は主任司祭ですから、司教、司祭、つまり聖職者中心であることは当然のことです。

しかし聖職者独占主義になってはなりません。もつとも、いまや福音化活動は多岐にわたっていますので、司祭独占ではどうにもならなくなっていることも事実です。

が……。いまや自然の流れとして、役割配分の名人としての司祭の能力が問われるようになってきています。

評議会のほかに「コンベンツス」と呼ばれる司祭だけの地区の集まりがあります。この集まりと評議会がちょうど、人間の血管で言えば、動脈と静脈のように相補って、キリストの体としての教会に、生命を吹き込む役割を果すようになっていっています。

Q. 少し言いにくいのですが、評議会を舞台にいろいろなことが決められるようになって、司祭団との考え方が一致しないことも起こってきているように思うのですが……。

A. それが具体的にどのようなことかわかりませんが、司祭と言えども人間ですから、互いの間にいろいろな考え方のずれが生じることがあるのは当然だと思います。

それでもじっくり話し合うこと、そこに希望を持ち、イエス・キリストの姿に向けて変わっていくこと。この過程が世界に対して「あかし」となるということを押さえておきたいものです。

あの神父さまは保守的だとか、あの神父さまは改革派だとか言われることがあります。

また、これまでなかったような行事や事業が提案されると「意味がない」などという意見が出されることが確かにあります。

ここでよく確認しておかねばならないことは、教会はイエス・キリストの姿に近づぐためにのみ、さまざまな努力をぎりぎりまで続けていくのだということです。その結果として保守しなければならぬこともあるし、あるいは改革しなければならぬことも出てくるわけです。

また「意味」の問題ですが、神が造り給うたこの世界と、その中で行われることはすべて意味がある、ということがまず原理となります。

問題は意味、すなわちすべての世界の現象が含んでいる「味」を味わう感性を持っているかどうかということが問われているのです。

たとえば殉教祭にしても、殉教地を整備することにしても、教会一致運動のために様々な行事を行うことにしても、味覚が確かであれば食べ物がおいしいように、その行事その事業をおいしく味わうことができます。

もちろんこの料理はどう考えてもまずいということがあるように、どうにもいただけない政策や提案はあるかもしれませんが……。

司祭の役割は、人々のそれぞれの人生の味も含めて、すべての人間の営みの中に息づく、イエス・キリストの味を味わう力を、開発して行くことにあると言えるでしょう。

新しい要理

「共に歩む旅」

(19)

第十七課 「神の民、教会」



【進行係】(参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める)  
 「一人か二人の方が祈りで神さまをこの席に招いてくださいませんか。」  
 (誰でも自由な祈りを捧げる)

A. 私たちの生活

教会は、すべての人が神の愛の中で、たがいに兄弟姉妹として集まり、一つになるので、「一つ」であり、三位一体の神が教会を一つにし、教会を神の恵みで満たされたことで、「聖」なるものとされます。

そして、教会は全てのの人たちが救われることを切に望み、彼らを招待するので、「公」(普遍



的・カトリック)のものであり、使徒たちと初代教会が体験した神の愛を伝えるので、「使徒から続いて」(使徒伝承) 今日ま

で来ました。

【進行係】

「左上の写真を見ましょう。」

【進行係】(参加者たちに質問する)

①教会は様々な共同体の姿で示されます。写真を見ながら教会の姿について、互いに話し合ってみましょう

②「教会」ということばを聞くとき、あなたはどんな考えが浮かびますか。

B. 神のことば

教会とは、「神の民」を意味します。神が私たちに与えてくださった救いの約束は、キリストを通して実現されました(Ⅱコリント1・20)。

神の民(教会)の頭はキリストであり(エフェソ1・22)、この「神の民」につながっている人は神の子供であり(ローマ8・15)、掟は愛の掟であり(ヨハネ13・34・35)、この民の目的は神の国の実現です(マタイ6・33)。

【進行係】

「どなたかⅠコリント1・1、

3(神の聖なる民)を読んでくださいませんか。」

「ほかの方がもう一度読んでくださいませんか。」

「次の聖書の箇所を一人ずつ順番に祈るように読んでくださいませんか。」

(同じ箇所を3回繰り返して読む間、他の人は沈黙を守る。)

「神のみ心によって召された」(3回)

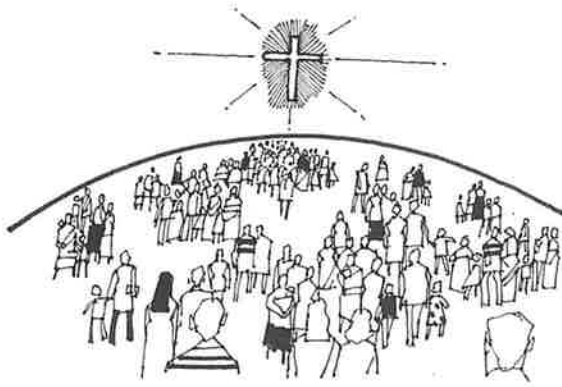
「キリスト・イエスによって聖なる者になる」(3回)

「召されて聖なる者」(3回)

「恵みと平和」(3回)

教会はキリストの体であり、万物を完成される方の計画が、その中で完全に達成されます。(エフェソ1・23)、キリストの体である教会は、多くの部分を持つています。神は、この一つ一つが調和をなし、互いに助け合うことを望まれます。体の全てが有機的に繋がり、各々任せられた役割をよくはたす時、体





も健康で仕事も効果的に出来るように、キリストの体である教会もおなじようにできるのです。

【進行係】

「どなたかエコーリント12・12・27（キリストの体と肢体）を読んで下さい。」

【進行係】（参加者たちに質問する）

①使徒パウロは教会を「キリストの体」だと言います。

その意味は何かを互いに話し合ってみましょう。

②この聖書のことばに照らして

みると、望ましい教会の姿はどんな姿だとおもいますか。  
③そのような教会になるために必要なことは何でしょうか。

【参考聖書】

\*マタイ 16・13・20

ペトロの信仰告白

\*マタイ 25・14・30

タレントのたとえ

\*マタイ 28・16・20

弟子たちの使命

\*ルカ 10・1・9

72人の弟子の派遣

\*エフェソ4・11・16

一致の呼びかけ

C. さらに一歩進んで旅をつづけよう

教会を建てた方はイエス・キリストであり、導く方は聖霊です。教会はイエス・キリストを通して現れた神の愛を絶え間なく世に知らせながら証します。教会は、自分の為に生きるのではなく、人々のために、神の国の成長のために存在します。

【進行係】（参加者たちに質問する）

①求道者共同体の集いが、キリストの体と同じ共同体になる

ために、私たちに出来る活動はどのようなものがありますか。

②今出てきた色々の活動の中で、最も重要だと思われる活動一つを選んで、具体的な実践案を話し合いみましょう。

【進行係】

次の「神を信じる人の祈り（信徳唱）」を一緒に捧げて、集いを終わります。

救いの源である神よ、わたしは、永遠の真理であるあなたが、主キリストとそとの教会を通して、教えてくださることすべてを信じます。

アーメン。

【進行係の心得】

\*これまでヒエラルキア（位階制）を大事にするあまり、神の民すなわち全信者の役割が見えなくなっていたことは事実です。したがって、位階制の本当のあり方も隠されていたとも言えます。

交わりつつ宣教する教会の本来回帰を目指す必要があります。

【覚えましょう】

49. カトリックとキリスト教は違う宗教ですか。

\*キリスト教はカトリックと新教（プロテスタント）を総称した言葉です。

50. 小教区、聖堂、教会はどう違いますか。

①小教区：地域社会の中で基礎的な教会共同体をなす一つの教会を言います（浦上小教区）。司教から権限の委任を受けた司祭が常駐しながら定められた管轄区域を司牧します。

②聖堂：聖なる場所を意味し、ミサが挙行されて聖体の置かれた建物を言います。

③教会：聖堂や小教区よりもっと広い意味で使用されます。キリストを中心に信徒、修道者、聖職者たちが集まった共同体がまさに教会です。



永井隆博士と

## 「神の摂理」 の問題

長崎大司教区司祭  
山内 清彦

### 第4 神はなぜ不完全な被造物を 創造されたのか

ここでわたしたちは、前述の『カテケジス』で読んだように、神はなぜ「被造物」を、「完成されたもの」としてではなく、「固有の善と価値」、

そして「目的」とを有しながらも、「完成途上」にあるものとして創造されたのだろうか、という問題に突き当たります。同じ問題を違った角度から表現すれば、神はなぜ、「完成途上」にある被造物を創造しないで、初めから完全無欠な被造物を創造されなかったのだろうか、というように言い換えることができるでしょう。しかしこのような質問は、すでに矛盾を含んでいます。完全無欠な被造物など存在しえないからです。「完全無欠」な存在と言えば、それは「唯一の神」以外には存在しえないし、考えられさえしないからです。もし複数の「完全無欠」なる存在があるとするならば、それは、「絶対者」である複数の神の存在を認めることとなります。換言すれば、もし神が、他の「完全者」を創造するとなれば、神は、もうひとりの他の「神」を創造しなければなりませんし、もしそうであるならば、この新たに創造された「神」は、もはや真の「神」ではなく、単なる「被造物」に過ぎなくなりません。神によって創造されたものだからです。ここからわたしたちは、神以外のすべての存在は、被造物であり、被造物であるかぎり、明らかに「不完全」な存在であるこ

とは明白である、と結論せざるをえません。

しかしここでも、わたしたちの疑問は、まだ完全には解消されません。では、神はなぜ、「不完全」で、「完成途上」にある被造物を創造されたのか、という問題が未解決のまま残されるからです。このような問いに対して、わたしたちはまず、神は完全な自由をもって万物を創造された、と言わなければならず、この点については、何の疑問の余地もありません。神を拘束し、義務づけるものは何もないからです。しかし、神がいかに「自由」であるとは言っても、むしろ完全に「自由」であるからこそ、その目的は明白でなければなりません。神は、全被造物を、そのままの姿、すなわち「完成途上にある」まま終わらせるために創造されたとは考えられません。そこには何かの意義なり、目的があったはずで、万物の創造主である神は、それぞれの被造物を、「固有の善と価値とを備え」たものとして創造されながらも、神によって定められた固有で、究極の完成、ないし目的に向けて造られたはずだからです。『カテケジス』の表現を借りると、まさに「完成途上にあるもの」(302番)、と

して造られたからです。では神は、どのような計画で、この「完成途上」にある被造物を完成に導くのでしょうか。ここに新しい問題が提起されます。もちろんこの問題について、わたしたちは満足するような完全な解答を見いだすことはできません。これはたしかに神の神秘的奥義の一つだからです。この点について『カテケジス』は、わたしたちは多くの場合、世界と歴史の主宰者である神の「摂理によって敷かれた道を知らない」と教えています。しかし経験上明らかかなことは、「道の終わりに至り、完全な知識を得て、『顔と顔を合わせて』(1コリント13:12)神を見ると、初めて摂理の道を十分に知ることが」できます。こうして神は、このような摂理の道を通して、「被造物に悪と罪の悲劇を踏み越えさせながら、天地を造られた目的である最終の安息の日の休息へと導いておられる」のです(『カテケジス』314番参照)。右に挙げた『カテケジス』の最後の言葉、すなわち、「被造物に悪と罪の悲劇を踏み越えさせながら、天地を造られた目的である最終の安息の日の休息へ」と導く神の摂理、という新しい表現についても、簡単な説明、ない

し解説が求められます。そこで以下わたしたちは、「物理的悪」や「理論的悪」と摂理の関係について、さらに考察を求めなければなりません。

## 第5 物理的悪と神の摂理

わたしたちはすでに、ライプニッツのいわゆる「形而上的悪」、すなわち万物の被造性、有限性についてみました。この「形而上的悪」は、大きく分けて、直接的には「物理的悪」と、「倫理的悪」、すなわち「罪」とに区別されますから、以下わたしたちはこれら二つの「悪」と神の「摂理」との関係について考察を掲げましょう。『カテケジス』には、「神がその全能の摂理によって、被造物によって作られた悪、たとえそれが道徳的悪であっても、その悪の結果から善を引き出すことがおできになることを、人々は時として理解することができ」（312番）、と記されています。そこでまずわたしたちは、物理的悪と摂理の関係について、次いで「罪」、すなわち「道徳的悪」と摂理の問題について考察することにししましょう。

### A 物理的悪と神の摂理

わたしたちが住んでいる世界には、種々様々な悪が混在しています。それはすでに述べましたように、被造的存在ですから当然なことです。地震、台風、大洪水をはじめ、いろいろな自然災害や貧困、また動物が生きるためには欠かせない弱肉強食の事実もそうですし、人間の意志や努力だけではいかんともできないという意味では、わたしたちをたえず悩まし、苦しめる病気や死もまた、物理的悪と考えられます。では神はどのような物理的悪から、わたしたちがどのような善を引き出すことの期待されているのでしょうか。たしかに、物理的悪が悪のために存在しているはずはないからです。

まず、わたしたちの日常的経験で明白な動物の世界に顕著な「弱肉強食」事実について考えてみましょう。『カテケジス』は、この問題については、「神の計画によって、この生成には、ある存在が出現すれば他のものが消滅し、より完全なものがあればより不完全なものも存在し、自然的形成もあれば、破壊もあることになっています」（『カテケジス』、3

10番）、と答えています。たとえば鳥たちは、農夫たちがせっかく蒔いた麦の種をあさって食べて成長します。しかし人間は、こうして大きく成長した鳥を殺し食材にして美味しく食べます。農夫たちは、丹念に田畑を耕して農作物を植え、大切に育てますが、しかしその農作物を期待通りに成長させるためには、この農作物に群がる動物や小鳥を追い払い、あるいは殺して、農作物を守ってこそ、わたしたちの食材として収穫できます。このような一連の流れは、生きとし生けるものが、生き続けるために、必ず辿らなければならぬ自然の法則ですから、その節度が守られている限り、これを無条件に否定したり、糾弾することはできません。わたしたちは、しばしば甚大な被害、台風や大洪水、大火災などの事実と闘うために、不完全ではあっても、より強硬な堤防や防火設備を完成させ、地震や津波までも、ある程度は予測できるようにしました。最近の医術の進歩は特に顕著です。

人類は多くの病が予防され、かつての「死に至る病」から回復し、長寿を喜べるようになったからです。不完全さは発明と進展を生み、それ

は、より高次な善につながります。



はがき「如己愛人」

から転載



## 大司教談話室

⑨

## 説教について



Q. 心に届く説教ということについて、どのように考えておられますか。もちろん聞く側の心構え次第ということにもなりますが、説教者側のお考えをお聞かせください。

A. まず神のことはそのものであられるイエスご自身の説教について言えば、説教の内容は福音書に記されている通りですが、イエスは説教だけではなく病人を癒すなど救いの業を行われました。そして、「律法学者のようにではなく、權威ある者としてお教えになった」ので、人々はその教えに驚嘆しました(マルコ1:21-22; マタイ7:28-29; ルカ4:22参照)。しかし、故郷の人々(マタイ13:53-G; ルカ4:22-29)、ファリサイ派の人々や律法学者など、つまり人々も少なくありませんでした(マタイ9:32-34; ルカ11:53-54参照)。弟子たちさえ、イエスのことばを理解できないことがありました(マルコ9:32)。イエスは、ファリサイ派や律法学者を非難しました(マタイ15:1-20)。

しかし、最後には同胞のユダヤ人に訴えられ、裁かれ、ローマ総督から死刑の判決を下される結果となりました。

心に届く説教、あるいは心の琴線に触れる説教をすることはそれほど簡単ではありません。説教する人に求められていることは、一般的に次のようなことです。まず、(1)聖書の意味をよく理解すること、(2)聴衆の生活状況、信仰の知識や感覚などをよく知ること、そして、(3)聖書をわかりやすく説明し、それを具体的な生活とうまく結びつけるように話すことです。そのために、聖書について絶えず学び、祈り、黙想する必要があります。また現実社会のこと、その中で生活している信者たちが病氣、人間関係、仕事、経済問題などで不安や苦しみ、喜びや幸せを味わっていることに共感することが大切です。もちろん話術も必要です。起承転結、話の筋が通ること、具体的でわかりやすい言葉や表現を使うことなどが求められます。何よりも聖霊の働きに信頼し助けを祈り求める必要があります。

イエスや偉大な宣教者パウロでさえ、すべての人々を満足させる説教ができなかったことは励みになります。主日のミサでは普通、幼児から高齢者までのさまざまな生い立ちや学歴や経験を持った人たちがいて同じ説教を聴くわけですから、所詮すべての人の心を打つような説教は不可能に近いでしょう。それにしても、どうすれば神のことばをそのような会衆の一人でも多くの人々の心に届けて、彼らの心の糧、生活

の指針となるようにすることができるとか絶えず考え祈りながら、毎回あらたな挑戦をするだけです。

説教のときこれだけは避けたいということがいくつもあります。たとえば会衆の前で名指しである人に批判や非難の言葉を向けること、「上から目線で」、つまり見下してものを言うこと、差別的な発言などです。むしろ、信者を元気づけ励ますような建設的で暖かい内容をやさしい言葉遣いで伝えるような心がけることが大切です。

なお、聴く側にも受け入れ方の課題があると思います。哲学の原理の一つに「どんなことでも、それを受け入れる人の受け入れ方によって受け入れられる」というのがあります。これは重要なことです。もつとも、説教者に対して嫌悪感や拒絶感を抱いていれば、どんなにいい話を聞いても批判したり受け入れなかつたりするものです。説教をする人を尊敬し愛していれば、説教そのものも受け入れやすくなるでしょう。説教する側の責任が第一であることは当然だと考えます。しかし、説教のせいで説教する司祭を嫌いになるなら、悪循環に陥りかねません。神のことばを受け入れる「良い土地」でありたいものです。



(高見三明)



## 無料お試し期間中!?



私は毎週月曜日になると奈留島から福江島に船に乗って出かけます。下五島地区の他の教会の神父様方と夕食を共にするためです。集合場所として福江教会にお世話になっています。

ところで福江教会では5月と10月に、教会学校の子供たちのロザリオのお祈りが夕方5:00から行われています。早い子供たちは学校が終わってからそのままランドセルを背負ったまま教会に来ます。そしてロザリオが始まるまでそれぞれ宿題をしたり、遊んだりして時間を過ごしています。私は「月曜日にいつもいる神父様」として顔を覚えられ、福江教会の子供たちと関わらせて頂いています。

そんなある日の月曜日、一人また一人と教会に来る子供たちの中に見慣れない子がいました。「誰かな?」と思って見ている私に気づいて、そのお友だちを連れてきた教会の子が「この子供たちはね、今無料お試し期間中なんだよ」と教えてくれました。少し考えてから「あーなるほど、そういうことね」とやっと理解できました。彼らは求道者だったのです。

本人だけなのか、あるいはお父さん、お母さんもなのか、そこまでは分かりません。ただ、学校から求道者のお友だちを教会まで連れてきたことに感心しました。しかし、それだけでは終わりませんでした。しばらく別の所においてまた戻ってみると、なにやら「父と子と・・・」と聞こえてきました。ロザリオが始まる前に、教会の外で十字架のしるしの仕方を、さっき学校から連れてきた子が教えてあげていました。「頭のところで、父と・・・おなかのところで、子と・・・左の肩のところで、聖霊の・・・右の肩のところで、み名によって・・・手を合わせてアーメン」その様子を後ろから見ていた私に、「先生」は、「もう！神父様もちゃんと教えてよ!」と言われてしまいました。でも正直なところ、手（声）出しをするのは良くないと思って、そのほほえましい光景を幸せな気持ちで見っていました。何とも言えない喜びがありました。福音は確かに伝わっている、イエス様はここにいらっしゃる、そう思えたことが何よりも大きなお恵みでした。

福音宣教について考えるときにわたしたちはどうしても眉間にしわを寄せて議論を戦わせません。「ああでもない、こうでもない」と。たしかに神学的な理論も必要でしょう。ただ、そこで終わってはいないでしょうか。まず身近なところからの実践が必要ではないでしょうか。十字架のしるしの仕方を教えてあげていた“先生”の気持ちはただ、「伝えたい」、「教えてあげたい」というストレートな気持ちだったと思います。

さて、今私たちは「司祭の年」を過ごしています。司祭の年は司祭だけの年ではありません。洗礼の恵みを受けた全ての信徒には共通祭司職が与えられています。

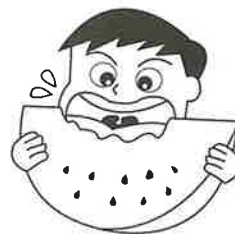
「信徒はキリストの祭司職にあずかります。キリストにますます一致して、洗礼と堅信の恵みを、個人、家族、社会、教会生活のあらゆる分野で発揮し、すべての受洗者に向けられた聖性へのよびかけにこたえます。信徒はその預言者的使命によって『社会のまっただ中で、万事においてキリストの証人となるように呼ばれています』（現代世界憲章43参照）」

（カトリック教会のカテキズムNo.941、No.942）

「無料お試し期間中」のあの子供たちは今どうしているのか分かりませんが、受けた教えをしっかりと受け取って、洗礼のお恵みを頂けることを心から願っています。

これから奈留島の中で、信徒の皆さんと力を合わせて少しずつ信仰の輪を広げていくことができるように、神の国の完成を目指してまた精一杯頑張っていこうと思います。

カトリック奈留教会  
主任司祭 本田靖彦



# ホームレス

## 支援活動について

「長崎・ホームレス支援活動を準備する会」  
事務局 井手義美（飽の浦教会所属）

### 「いのちを守るための緊急アッピール」

今年一月に日本カトリック司教協議会の中の社会司教委員会（委員長・高見大司教）と関係の諸団体連名でこのアッピールが出されました。

そこには、昨年後半からの世界的経済不況により、多くの工場や企業で減産・事業縮小が進められ、従業員削減、特に大量の派遣労働者の派遣切りや期間労働者の雇い止めが生じ、日本各地で野宿者が急増したと、そして、多くの人がいのちの危機に直面していることを訴え、今、特にその最悪の結果である「路上死」と「自死」を出さないために私たちに何が出来るか、教区・小教区・修道会・信徒の団体で考えて頂きたい旨のアッピールがなされています。

これまで路上生活者については、「そう言ったのは怠け者の自己責任」とみなされる差別的偏見が残っていました。しかし、働きたくとも職が無いなどで、やむなく路上生活を余儀なくされたというのが現実ではないでしょうか。このアッピールでは、路上生活の状態は人が人らしく生きる基本的人権すら損なわれており、炊き出しや医療・法律相談、緊急避難の場所の提供などの支援活動へ参加・協力して欲しいと皆さんへ強く呼びかけられています。

### 長崎市でのホームレス支援活動について



表）、高橋靖子氏（ユニセフを通じて世界の子どもを考える長崎の会）代表、友納靖史氏（長崎バプテスト教会牧師）などの皆さんで、集いにはかれこれ百人ぐらいが参加しておりました。

基調講演として、NPO法人北九州ホームレス支援機構の常任理事・森松長生氏がホームレス支援の体験と実状を語られました。二十年を越える実績を踏まえて、「なぜホームレスになるのか」、「支援活動の実情」などについて分かり易く説明されましたが、幾つか紹介しますと、

- ・ホームレスは好きでやっているわけではない。
- ・「ホームレス」とは家族、兄妹、友人など的人間の関係性の喪失状態。
- ・帰る場所と人がある人は野宿化しにくい。

### 長崎市での取り組みについて

講演に続く全体会議で、「長崎・ホームレス支援活動を準備する会」がスタートしました。

一週間後に二回目の集いが開かれ、「炊き出し」、「自立支援」及び「事務局」の三つのグループに分かれました。登録メンバー数は四十人ほどで、私は「事務局」に入り、あわせて、会のホームページ作りも買って出しました。

今年二月七日に長崎市民会館で「今、長崎で必要とされるホームレス支援とは何か？」との集いが開かれました。呼びかけ人はこれまで長崎でホームレス支援活動などをされている佐々木康氏（ホームレス支援グループ「ホーム・カトリア」代表）

毎月第三土曜日に、定例会を開くとともに、毎週一度、弁当配りを行なっています。また、必要に応じて、「NPO法人化」についてや、ホームレスが家を借りる際の「保証人バンク」についての勉強会を行なっています。弁当の炊き出しには、飽の浦教会や中町教会他の有志の方々もお手伝いしています。

弁当配りは、夜の八時又は十時頃から市内の某所で行なっています。参加者は十人前後で、出会うホームレスは五、六人ぐらいですが、その場に居合わせない場合は連絡先を記したメモと一緒に弁当や飲み物、薬などを置いてきます。何回か接しているうちに何がしかの会話も出来るようになります。要望や事情を話してくれることもあります。

### 今後の取り組みについて

あるホームレスは、会のメンバーが北九州ホームレス支援機構の「保証人バンク」を利用して保証人を引き受け、生活保護を受給して家を借りることが出来ました。又、別のホームレスへ生活保護の受給を勧めたら、審査の際に家族に連絡されることを恐れていました。

その他の活動内容やスケジュールは会のホームページでご覧になれます。

まだ、大した支援活動はしていませんが、少しずつ充実をはかり、将来的にはNPO法人化を目指す予定です。

一人で出来ることは限られます。やはり、組織的な支援が必要ではないでしょうか。

皆さんの参加とご協力をお願い致します。



# 「ザビエルが遺したもの」



小規模作業所サクラ

私たち一粒の麦の会はザビエル渡来450年記念オペラ「忘れられた少年」で集まった仲間たちのボランティアで歩み始めました。1999年の春「忘れられた少年」というオペラに出会ったことからの苦難の始まりでした。でも、それはいろんな方々とのすばらしい出会いの始まりでもありました。オペラの大成功、母子家庭の支援、聖書100週間、聖歌隊ゆりの会結成、2000年第一100回クルシリオ、2001年聖霊降臨のお祝い日から歩き始めた巡礼、そんな中から一粒の麦の会も形になっていきました。古い民家を改装して2001年5月20日長谷神父さまから祝福を頂き、古川神父様からサクラメントのサクラだけどかわいい桜の花のように明るい作業所になりますようにと祝辞を頂いたあの日が昨日のことのように思われます。飽の浦教会の福祉委員会、俵町教会、紐差教会、山田教会、天神教会、黒崎教会、滑石教会など沢山の教会の信徒さんから沢山の支援を頂きました。オペラの実行委員会から福祉

法人立ち上げをなさって下さった理事長神父様は、私たちの活動をキリストの愛の奉仕の実践と定義されています。

小規模作業所サクラとして5年間が過ぎ、現在のサクラは2006年7月12日高見大司教様に祝別をいただき恵の内に開所することができました。毎日、聖歌を歌って平和のために祈りをして、それからパンを焼いて販売に出かけます。洗車の注文があるときは洗車をします。メール配達も最近始めました。自立支援法で、障害者の工賃を上げるようにとか、就労するようにとか、現実を厳しいのですが、なかなか田舎では、思うように出来ません。でも私たちは、夢を持って希望を持って毎日を頑張っています。サクラに来たら元気をもらった「ありがとう」と声を掛けて下さいます。そんな時この子たちの大きな存在を感じます。先日北松浦ライオンズクラブ様から創立記念10周年の記念として放送機器を頂きました。当日お礼にみんなで歌を歌って感謝の気持ちをお伝えしました。目頭を押さえながら「感動しました、来てくれてありがとう」といつて下さいました。そんな時って私たちが胸が熱くなります。神様ってこんな形でご褒美をくださるのです。毎日が平和に過ごせたらいいなと日々思いますが平和な日は、あまりなく日々なにかが起り、驚いたり笑ったり、泣き虫になったり、ありのままに利用者を受け入れるということが、私たちの精一杯の神様へのお返しです。どうにもならないことを、どうにかしようとしても、どうにもならない。それでも、どうにかしようすると神様は応えて下さる。パンを焼いても思うように販売先がありません。でも神様は自然のように、人の心を通して

販売先を下さる。一本の電話を通して修道院や保育園から注文を頂きます。なんと嬉しいことでしょう。洗車に行った教会で「わざわざですが水代を」と申しましたら「水代はいいよ。私たち小教区の信徒が、知らない方々に奉仕が出来るということは、素晴らしいことだから」とおっしゃって下さった神父様の言葉に、涙がポロポロと、とまりませんでした。私の力は小さいけれど、沢山の方々の暖かい心で大きな力になり、サクラの活動が在るのです。5月からパン教室を始めました。ひとつのグループは佐世保の聖歌隊のグループ、もうひとつは上神崎のクルシスタの皆さんです。

祈りに始まりパンを焼いて、焼きたてのパンを頂きながら分かち合いに時間が足りないくらいに至福のときを過ごしています。出会いは神様からの贈り物、一つ一つが大切な贈り物です。これからもケアハウスの立ち上げ、自立支援法への移行など難問がいくつもありますが、いろんな所でいろんな出合いをサクラの活動を通して出来ることを願っています。

神様が招いてくださいます。毎日みんなの笑顔に、出会うことが出来ますようにと、感謝のうちに。

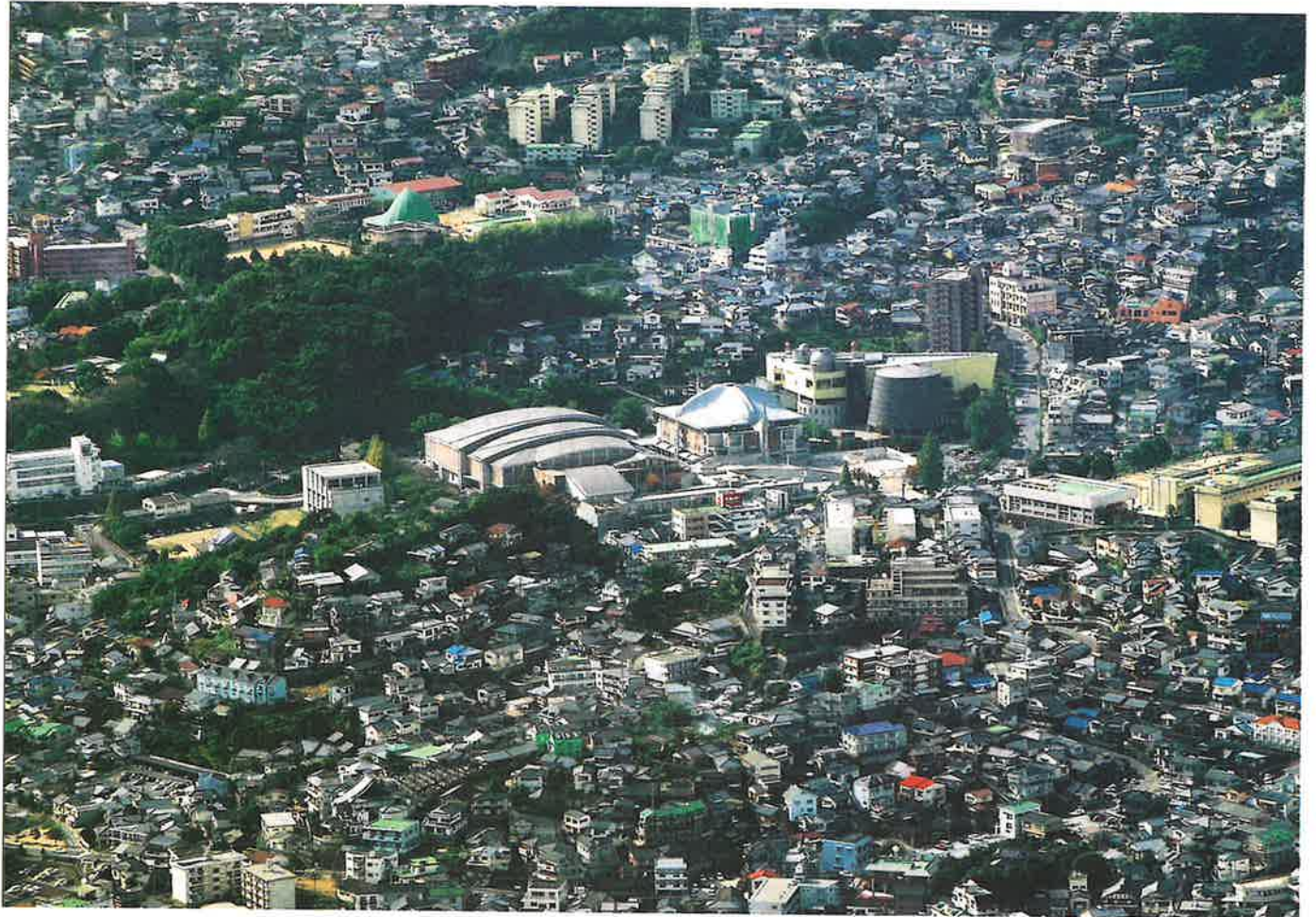
社会福祉法人一粒の麦の会

(末永 幸子)





# 生活教会 の中の教会



城山教会

フォトプラン 山本 富夫

## 城山

城山の小高い「マリアの丘」に立つ教会堂。聖霊の風を受けるかのように、広く高く帆を張っている。

一九五二年、アウグスチノ会の司祭、三師が長崎の地を踏み、宣教活動の始まりを印した。

二年後、司祭館と幼稚園舎を建立し、浦上から独立して小教区へ。

一九五五年、慰めの聖母城山教会堂を献堂。

その後、聖マリア学院小・中学校を開校し、教育事業にも従事。

二〇〇〇年、大聖年を機に、新教会堂を献堂。

船に見立てた新堂は今、確かな航跡を印している。